

プロジェクト研究報告

ストレス理論の使われ方：その医学的概念の歴史的社会構築

池田光穂・田口宏昭・林田康子・
嶋澤恭子・下地明友

外傷後ストレス障害 (PTSD) に代表される「ストレス」という生物医学用語は、現代社会では患者のみならず、共同体、社会、さらには国家が直面するものまでに適用され汎用されている。本研究の目的は、この医学言語概念の社会的な語用論について、精神医学や産科学という専門的医学領域や、素人 (layman) 向けのマスメディアなどの領域において多角的に実証分析することにあつた。このことを通して前年度に助成された「保健医療の社会的構築に関する研究」で明らかにされた理論的枠組みの内容を本年度は、より具体的にかつ詳細に分析することが主たる目的となった。

本研究に関連した今年度の研究進捗状況は次のとおりである。研究代表者の池田光穂は、医療人類学におけるストレス概念の思想史的展開を、「体液理論」(humoral theory) ないしは「体液病理学」(humoral pathology) を事例にして考察した。このことによりストレス研究を学説的に理解するためには、身体の状態を表象する学理的/民族科学的隠喩を通文化的に分析する必要性を強調した。共同研究者(参加者、以下同様)の田口宏昭は、彼自身が研究代表者の「ストレスの社会・文化的規定性とそれへの適応過程に関する研究」(基盤研究(C)(2))に関連付けて、ストレスの社会学的文献を渉猟し、その認識論的枠組みに関する批判的研究を進めた。それによると、社会心理学の系譜に位置づけられるこの領域の先行研究は、その解釈図式の中に「社会と個人」という枠組みが常にセットとして存在し、この両者の相互作用による説明が多くの文献にあることを明らかにした。林田康子は、精神病院における作業療法過程におけるリアリティ構築の会話分析を続けているが、そこでストレスについて言及される時に、それは田口が明らかにしたような「社会と個人」という二項対立のうち、病理に関する説明が原因として考えられる「社会」のほうに焦点化されずに、病理を体現する「個人」のほうに焦点化される傾向があることを指摘した。現在、その理由が会話のパターンの論理的展開から論証されるのか、文化人類学が明らかにするような「文化のパターン」の影響下にあるのかについて、グレゴリー・ペイトソン [1935] の分裂生成 (schismogenesis) 理論から説明可能であるのかを検出中である。嶋澤恭子は、出産経験の近代化についてラオス・モンクメール系「タリアン」の民族誌調査に専念し、当該研究に関連する資料を分析中である。しかし現在のところ「ストレス」に対応する文化的カテゴリーが当該の民族においては見つからず (= 翻訳語ないしは翻訳概念における対応物がない)、むしろ心理-宗教的語彙の範疇の成分分析アプローチから析出可能であるかを検討中である。最後に、医学薬学研究科の下地明友は、精神医学的専門知識が欠ける嫌いがある他のメンバーの学術的助言者として、個々の研究報告に適切なコメントや誤りを指摘し、本研究プロジェクトに大きく貢献した。

下記の研究報告は、池田光穂の分担分の報告(一部)であるが、ストレス研究の根幹となる、西洋的知的伝統における体液理論の文化批判的研究について指摘したものである。

体液理論ないしは体液病理学 (humoral theory, humoral pathology) は、広義には (1) 身体健康や病気の状態を、体液あるいは(身体)の構成要素の均衡や不調和によって説明する理論である。身体を構成する諸要素は抽象化された実体でもあるが、必ずしも液状のものである必要はない。さまざまな民族(民俗)医学のなかにこの種の病因論が見られる場合、体液理論という用語が使われる。これが文化人類学における一般的な用法であ

る。

他方、体液理論や体液病理学には、語源につながる狭義の定義がある。それは(2)紀元前5・4世紀の古代ギリシャのヒポクラテス派の医学に起源を發し、紀元2世紀のガレノス (Galenos) により集大成された医学理論をさす場合である [Smith 1979]。したがってこの医学は総称としてヒポクラテス・ガレノス学派と呼ばれることもある。古代ギリシャ・ローマの伝統によると、人間の身体は血液、粘液、胆汁、黒胆汁の4つの液体的要素から成り立ち、人間の健康状態や気質は各人がもつ4つの要素のバランスと風土との関係のなかで決定すると考えられた。それゆえにこの理論は、四体液学説と呼ばれることもある。

これら2つの定義がもし仮に別個に無関係であれば話は簡単なのだが、実は前者である民族(民俗)医学上の概念を説明するのに、後者のガレノス流医学をプロトタイプとして用いたところから、この医学理論上の概念が混乱するという不幸が始まる。

もともと医学史では、科学の進歩思想の影響を受けて、過去の医学理論である体液理論を古代ないしは中世の遺物ないしは未開な前科学的思考の産物であると考えてきた。世界の各地で發展した古代医学を見渡せば古代ギリシャ・ローマの体液理論から多少洗練度の劣った医学を發見することは医学史家にとり困難ではなかった。中国医学における陰陽五行説や、古代インドのアーユルベダ医学における3つのドーシャ(風、熱、冷)と同様、身体を有限の構成要素からなるものとして、それらの要素間の動的関係から疾病と健康をみようとした医学体系がいたるところに見られる。医学史家の依拠した資料はテキストを中心とするもので、その医学の実態に関する知識が圧倒的に不足しており、また研究者の思い込みを検証する手だても限られていた。これらの医学体系の研究において、民族誌上の関心をもって再考されるには、医学史家のE・アッカークネヒト (Erwin H. Ackerknecht) やW・H・R・リヴァース (W.H.R. Rivers) の出現を待つしかなかった。

人類学においては、アジアの医学の諸体系を比較検討したC・レスリーらが、1970年代に入って初めてこの医学の特徴を全体論と体液説に求めたことで、その理論的研究が始まる。他方、同じ時期に開発人類学の調査において、M・ローガン (Michael H. Logan) が、中央アメリカにあるグアテマラのマヤ系先住民の中に、古代ギリシャ・ローマの体液理論によく似た現象を見つけた。それが熱/冷理論 (hot-cold theory) にもとづく身体観や病氣・健康観であり、マヤ人のみならず広くメソアメリカと呼ばれる地帯に分布していた [Logan 1973, 1977]。この場合の熱と冷という要素は温度による分類ではなく、抽象的に概念化されたものであり、個々の食物や薬物、体質のみならず病氣あるいは風土などの環境要因にもこの二元分類 (dichotomy) を用いて説明するというものである [池田 2004:194-7]。ローガン [1973] は、この事実の報告を通して、保健プロジェクトにおける住民独自の健康概念の把握することの重要性を説いていた。人びとの身体への関心や理解ぬきに、近代的な衛生概念を導入することは不可能だと考えたからである。

しかしながらこのユニークな現象への関心は、それを応用することよりも、この理論の起源がどこに由来するのかということに向かっていた。15世紀末以降メソアメリカを含む新大陸はスペイン植民地となったが、宣教師たちによってもたらされた医学は、ヒポクラテス・ガレノス学派のそれであった。この事実が後にしてG・フォスターをして様々な民族誌の比較や植民地時代における医学理論の伝播の検証を行わしめることになる。その結果、新大陸における熱/冷理論が、もともと受け入れる素地のあった先住民の伝統の上に融合されたという考え [e.g. Madosen 1968] をフォスターは放棄し、新大陸の体液理論は、実は旧大陸由来の医学的伝統に他ならないと結論づけるようになる [Foster 1994]。

新大陸の民俗医学を調査すれば、熱/冷理論のほかにも邪視 (evil eye) など、フォスターの医学的伝統の伝播説を支持できるような類似の文化事象を發見することができる。だが彼の研究成果は、それほど多くの共感者を作り出さなかった。彼の歴史的伝播論は、現地社会の文化を反映する体液理論 [e.g. Lopez Austin 1974] という当時の多数派に支持されていた文化主義の命題にそぐわなかったからだ。その意味において、体液理論は非西洋医学の特性を担う表象として当時すでにその硬直した学術的意義を担わされていたことになる。それゆえ研究者の関心は、社会的文脈に即した民族誌上の細かい検討よりも、医学理論が伝播した結果であるのか、あるいは

は土地固有であるのかという二者択一の議論に限局されるようになっていった。

しかしながら人類学において体液理論が脚光を浴びるようになる半世紀以上前に、近代医学は体液理論という発想自体に再び光を投げかけようとしていた。その試みは生理学者のW・キャノン (Walter Cannon) によるホメオスタシス理論やH・セリエ (Hans Selye) のストレス学説などにみることができる。彼らは、身体を循環する体液のシステムの安定性維持のメカニズムや、体の一部分の損傷や心理的影響によって生理学システムの崩壊の神経化学的根拠を明らかにすることを通して、細菌という要素還元的な理論展開によりすでに成功を収めていた細菌病理学の後塵を拝していた生理学の知的復権に成功した。これらの研究はブドゥー・デス (呪術による殺害や衰弱死) 研究やレヴィ=ストロースの「呪術師とその呪術」や「象徴的效果」論文 (原著はともに1949年、『構造人類学』に所収) などの人類学的実証研究に刺激を与え、医学と文化人類学の架橋する知的貢献をもたらした。これらの先駆的研究は文化表象と生理的・心理的実体の間にある社会的な媒介の問題を取り扱っていたのである。

体液理論は、近代医学において過去の遺物ではなかった。近代医学はガレノスの時代とは異なった体液理論もっている。近代社会における代替医療運動の多くは体液理論に見られる全体論を特徴とし、近代医療と補完ないしは対抗しようとしている。このことが忘れられ、人びとが体液理論を過度に独立した実体であると捉え、非西洋医療のプロトタイプとしてロマンチックな対象化に向かった時に、医療人類学の体液理論はその分析的批判力を失うことになる。医療人類学において、体液理論が常にトピカルなテーマとして読者に喚起するためだけに使われ、理論的推進力にならなかった理由はここにあると考えられる。

【文献】

- ・ Foster, George M. *Hippocrates' Latin American Legacy : humoral medicine in the New World*. Langhorne, Pa. : Gordon and Breach, 1994
- ・ Leslie, Charles (ed.) *Asian Medical Systems : a comparative study*. Berkeley : University of California Press, 1976
- ・ Logan, Michael M. *Humoral Medicine in Guatemala and Peasant Acceptance of Modern Medicine*. *Human Organization* 32:385-395, 1973
- ・ _____, *Anthropological Research on the Hot/Cold Theory of Disease: Some methodological consideration*. *Medical Anthropology* 1:87-122, 1977
- ・ Lopez Austin, Alfred., *Sahagun Work and the Medicine of the Ancient Nahuas*. In *Sixteenth-Century Mexico*. M. Edmonston ed., Pp.205-24, Albuquerque: University of New Mexico Press.1974.
- ・ Madsen, William. *A Study of Change in Mexican Folk Medicine*. In *Contemporary Latin American Culture*. M. Edmonson ed., New Orleans: Middle American Institute, Tulane University.1968
- ・ Smith, Wesley D., *The Hippocratic Tradition*. Ithaca, N.Y: Cornell University Press, 1979.
- ・ 池田光穂「未来の宇宙につながる身体：マヤ医学の文化人類学」『マヤ学を学ぶ人のために』八杉佳穂編、Pp.188-205、2004年
- ・ 池田光穂「四体液学説」<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/cs/cu/040903humoral.html>
- ・ ガレノス『自然の機能について』種山恭子訳、京都大学出版会、1998年
- ・ ヒポクラテス『古い医術について』小川政恭訳、岩波文庫、1963年

(文責：池田光穂)